

一九四七年前後武田泰淳の中国観

——「蝮のすえ」の辛島の死を中心に——

李 娜 娜

LI NANA

【要旨】「蝮のすえ」は、一九四五年敗戦直後の上海を舞台として、敗戦国の居留民の生き様を描いた物語である。

本稿では、男性主人公である辛島の人物像、及び彼の死に注目したい。戦争中、日本の権力を代表していた辛島は、「日本精神」を宣伝し、敗戦後、中国当局に捕まれば死刑になると知りながらも、一般の日本人国民より豊かな生活を送っていた。部下の妻を奪った上に彼女を連れてフランス租界に隠れようとした。

旧正月の五日目の夜に、戦後の上海で、杉は、彼女に頼まれて辛島を殺そうと試みた。しかし、辛島はすでに彼女の支配した中国人若しくは朝鮮人の殺し屋により肉料理に使う刃物で殺された。辛島を殺されない場合、杉は辛島に殺される可能性がある。結局、「生きて行くことは案外むずかしくないのかも知れない」が、日本軍国主義の「権力」、「歴史」を象徴した辛島は生き抜くことができなかった。杉、彼女、病人の夫だけが日本に戻ってきた。

この小説を発表した一九四七年は、東京裁判の只中である。東京裁判は、アメリカが主導して行った裁判で、戦犯の罪は日本人自身で裁いておらず、他国によって判決を下されている。上海で敗戦を迎えた泰淳は支配者の立場から被支配者の立場に変わった。泰淳は「蝮のすえ」の辛島の死を通して、戦争協力者だった文学者らに処罰を受けようと発信しているのではないか。同時に、戦争の協力者であった自身はどのように「歴史」を反省すべきかを模索していると言えるだろう。

【キーワード】：武田泰淳、戦争反省、上海、文学者、殺人

一 はじめに

武田泰淳（一九二〇～一九七六年）の上海体験について、川西政明の『武田泰淳伝』によると、一九三七年から一九三九年の間、一人の兵士として中国へ出兵した。一九四四年六月、上海へ行き、出版機関の東方編訳館の出版主任として日本著書の中国語訳に携わり、翌年の八月敗戦を迎えた。

一九四六年四月、引揚げ船で帰国するまで、泰淳の上海体験は、二つの時期に分けることができる。前期は、上海に到着してから一九四五年八月まで、フランス租界に住んでいた。最初は、滬西の安和寺路にある小竹文夫の家に居候させてもらうことになった。一九四四年一月二九日、惇信路にあった福世花園十九号に移住した。一九四五年八月、上海

で敗戦を迎えた当時、泰淳の反応は『堀田善衛上海日記滬上天下
一九四五』⁽²⁾に書かれている。

私と武田氏とは一緒に帰った。帰りについても二人は一時黙然として
ゐた。

やがてぼつぼつ話し出した時に、氏は、日本民族は消滅するかもし
れぬ、そして若しも自分が支那にゐて生き残ることがあつたら、嘗
て東方に国ありき、といふことを中国人に語りきかせ、自分らがこ
れを語りつたへねばならぬ、と云ふ。(二三頁～二四頁)

後期は、敗戦から引揚まで、《中国境内日本侨民集中管理辦法》⁽³⁾に
従い、以前から上海に住んでいた日本人及び敗戦後上海に来たおよそ
十万人の日本人が虹口北四川路辺りに移住した。泰淳は「わが思索わが
風土」⁽⁴⁾の中で当時の様子を次のように記している。

∴日僑集中地区に追い込まれる私の前途に何があるか。「聖書」の
黙示録をよむ。吹きならす天使のラップの音につれ、あらゆる破壊、
徹底的な大滅亡の予言がまざまざと語られている。(四六二頁)

虹口区に集中された後、泰淳は友人の住む三階建ての小屋に居候させ
てもらふことになり、日本人に中国語書類を書く仕事、即ち代書業を始
めた。一九四六年、引上げ船に乗って、日本に帰国した⁽⁵⁾。

泰淳が帰還前後の一九四四年から一九四八年までに、十数編⁽⁶⁾の上海関
係の作品を書き上げ、さらに二十年後の没直前に「上海の蜩」を発表し
た。その中、一九四七年には、「審判」と「蝮のすえ」二つの作品を書

きあげた。「審判」の二郎は戦地で殺人を犯し、戦後「自分の犯罪の場
所たる中国にとどまりつづけ、絶えざる裁きに直面する生を選んだので
あった」と立石伯⁽⁷⁾が論じている。「蝮のすえ」の辛島は、軍の宣伝部で
権力をふるまい、敗戦後戦犯と追及されたが、裁判を受けずに彼女の手
配した刺客に殺された。「蝮のすえ」に関して、以下のような先行研究
がある。

日本側では、清原万里⁽⁸⁾は「武田が戦後派作家として認められたのも本
作によってであり、その意味では、戦後の出発期の武田を知る上では、
きわめて重要な作品だということができし、殺人が重要なモチーフと
して取り上げられていることから、戦後初期の武田の作品における「罪」
の問題を考えるには、欠かすことのできないものである」と評価してい
る。

立石伯⁽⁹⁾は泰淳が「敗戦国民の運命、亡国の民の行末」を考えていたと
述べ、渡部範子⁽¹⁰⁾は「人間のへ生、人間の生存の生々しい真の姿が描
かれている」、服部一希⁽¹¹⁾は「蝮のすえ」の主題は、存在論的抗争とその
超克ということができると論じている。道園達也⁽¹²⁾は「蝮のすえ」は自己と他者の関
係の物語である」と論じている。中国側では、中国人学者の李慶保⁽¹³⁾は「敗
戦は、当時の日本人に精神的な虚脱と『幻滅感』を与えたと述べ、陳
文⁽¹⁴⁾は「戦争における文化人への反省とこれから中日両国の間に位置付け
られる文化の橋掛けを担う知識人のあるべき姿勢を求めること」、黄翠
娥⁽¹⁵⁾は「敗戦国の居留民としては、どのような道を歩んできたとは関係な
く、自分のこのような『生』をどのように忠実に送っていく」と論じて
いる。

日中両国の学者らは、敗戦直後の上海を舞台として書かれた「蝮のす
え」から、泰淳の戦後日本及び日本人の「生」についての懸念を読み取っ

ていることが明らかになった。「生きて行くことは案外むずかしくないのかも知れない」(五四頁上段 一)と、小説の最初で綴ってある。小田切秀雄は一九四七年の「本土にいた日本人の多くも、戦争の激化・敗戦による崩壊のなかを必死で生きぬいていく」と敗戦後の上海の「在住日本人にはいつさいが失われ、生きてゆくことじたいが不安にさらされるという形で、敗戦による衝突と喪失とが最も典型的に現れた」と指摘している。

小説の中で、杉、彼女、病人の夫は引揚船に乗ったが、日本軍国主義の「権力」を象徴した辛島は、生き抜くことができなかった。本稿は、「蝮のすえ」を取り上げ、敗戦前後の日本社会背景を回顧し、主人公の一人である辛島及び彼の死に注目するとともに、一九四七年、敗戦直後の泰淳の中国観を考察したい。

二、一九四七年前後の日本及び日本人―東京裁判―

「蝮のすえ」は、一九四五年敗戦直後の上海を舞台として、敗戦国の居留民の生き様を描いた物語である。一九四五年敗戦まで、上海と日本の関係を顧みておきたい。

陳祖恩⁽¹⁷⁾の考察によると、一八六二年に千歳丸が長崎から上海に到着して以来、上海は日中両国の人々の交流する最初の都市となった。当時、蘇州河南岸は租界の地価と物件賃貸代が高いほか、虹口に住んでいた広東や浙江などの地方からの商人は、日本の商人と同じく新移民であるため、お互いに排斥しあうことがなかった。それゆえ、当時の上海にやってきた日本人は、虹口地域に落ち着いたのである。長年が経ち、日本人居留民は次第に日本人らしきコミュニティを形成してきた。虹口の日本

人街は、多くの日本人居留民のノスタルジーの対象となっており、上海におけるもう一つの「島国」でもある。

榎本泰子⁽¹⁸⁾は、一九二〇年代、上海の日本人社会は、階層分化が激しくなった。虹口で日本人相手の商売に従事し、最後は上海に骨を埋める覚悟を持つ人は、「土着派」と呼び、大銀行・大会社から上海支店に派遣された人々は、「会社派」と呼ぶ。「土着派」と、「会社派」の中の中間層が虹口に住む。「会社派」の中のエリート層(支店長、幹部社員クラス)は、欧米人のように共同租界のオフィス近くに暮らし、最も裕福な者はフランス租界に自宅を持っている。虹口と共同租界中心部は蘇州河で隔てられており、ガーデンブリッジで結ばれている。虹口の日本人に「河向こう」と呼ばれていると述べている。

上海では中国人、日本人、そして、その他の無国籍者らが生きている。白系ロシア人の多くは「フランス租界霞飛路を中心とした地域」に住みつき、ユダヤ人難民は「虹口の提籃橋に集まり、特に太平洋戦争以後、ユダヤ人は定められた隔離区に生活して、生きて行くためにどんなことでもする」と熊文莉⁽¹⁹⁾は考察した。

太平洋戦争が終わるまで、上海は、戦地でありながらも、他国籍の国民の混雑地でもある。日本人が、特権を持っていたが、貧富の差が激しかった。しかし、戦後、上海で日本人が特権だけではなく家財も失い、特定の地域に住む場所を限定され、組上の魚のようにさばかれることを待つ状況になった。

一九四五年前後上海の様子について、羽根田市治⁽²⁰⁾は、「一九四四年三月、上海物価急騰」、「一九四五年八月一日 虹口地域小東京杲然、街頭に日本人の姿なし」、「一九四五年八月二二日、上海物価暴騰、邦人の生活困窮者現わる」と記している。

一方、『戦後日本史⁽²¹⁾』では、ポツダム宣言を迎えたほとんどの国民は「飢餓に迫られ、生きるために、買い出し、闇取り引き、物物交換をくりかえしていた」と日本本土の状況を書かれている。

戦争犯罪人については、このポツダム宣言（昭和二十年七月二十六日）に「吾等の俘虜を虐待せる者を含む一切の戦争犯罪人に対しては、嚴重なる処罰を加へらるへし」と規定され、一九四六年五月三日から約二年間に渡って、日本の対外的な国家行動とその指導者に関する戦争犯罪の有無をめぐる裁判が行われた⁽²²⁾。

日本軍国主義が犯した罪は日本人自身で裁いておらず、他国によって判決を下されている。

三、「蝮のすえ」のあらすじ

主人公の杉は、終戦後上海で代書屋をしている。日本人や中国人の生活にかかわる証明書を作成し、翻訳をする仕事である。

小説の初日に、会元里にある家に、女の客が来た。先日、家屋の所有者である会社に嘆願書を書くことを頼んできた。この日、病人の夫のこの、軍の宣伝部の辛島との関係を告げられた後、翌日の来訪を約束させた。

二日目は、大晦日である。杉は、北四川路のはずれまで行って、彼女のアパートへ彼女の夫の見舞いに行った。夕方、彼女がまだ杉の家に来て、杉に辛島を殺してほしいと言った。

三日目（旧正月の元旦）は、杉は彼女の家に行かなかった。同日、彼女は夫と大喧嘩をした。喧嘩の原因は、彼女が別れ話を持ちかけ、夫はそれを断ったからである。

四日目（旧正月二日）は、自治会へ行く途中、衛兵にお辞儀をしなかったため、衛兵に叱られた。虹口市場は休みのため、海寧路のはずれの日本人の店で、ネーブルを買って病人の夫を訪ねた。病人の夫と一緒に日本に帰ろうと誘われた。午後、楊樹浦の画家の家にいき、泊まった。

五日目（旧正月三日）、楊樹浦の画家の家にも泊まった。杉の家に、彼女が来た。辛島も来て金城菜館で会うという旨のメッセージを残した。六日目（旧正月四日）は、虹口に戻る途中で乍浦路の映画館を通りかかった時に、水木会社の職工が保安隊に検束された仲間をとりかえしにきて、怪我人が出た事件を見かけた。杉は、当日の夜、辛島に会い、その時、彼女を連れてフランス租界に隠れる計画を聞いた。辛島は彼女にその内容を書いた手紙を送った。

七日目（旧正月五日）は、杉と彼女は、ガーデンブリッジを渡り、河向こうへ散歩に行った。この時、彼女は杉に手紙を見せて、辛島を殺してほしいと願った。そして、その夜、杉は彼女のために辛島を殺そうとした。辛島と彼女が約束した場所は、商店街をはずれ、中国人の住宅区を過ぎ、楊樹浦行ききの電車道路に近い場所であった。しかし、辛島は彼女の手配した殺し屋に刺され瀕死の重症を負い、杉の斧が振り落とされる前に死んだ。杉は、殺し屋のことを知らなかった。

八日目（旧正月六日）は、杉は彼女の家に行った。彼女に、斧で辛島を打ったことを告げた。

九日目（旧正月七日以後）は、午前六時に引き揚げ船に乗った。霧のため、船は揚子江の入口で一日一夜を過ごした。船が鹿兒島に着いた後、杉は辛島の死因の真相を彼女に聞いた。

四、辛島と彼の死

前節では、辛島が殺された経緯の概要を紹介した。

主人公の辛島に関する先行研究は、主に「辛島の人物像と象徴性」、「辛島の殺害と罪」に分けられる。

辛島の人物像について、小田切秀雄⁽²³⁾は「現代、豪傑」の「タイプ」で「辛島の像を描きだすことによって日本の権力の具体的形を作品のなかに設定し、これがつくりだす暗黒をめぐって作品が展開する」、吉田裕⁽²⁴⁾は「戦争中軍の宣伝部にいたという設定は、権力と政治に近かったという意味で歴史を意味している」、岸本隆生⁽²⁵⁾は「日本軍国主義を象徴している（権力）」、李慶保⁽²⁶⁾は「辛島は大東亜共栄圏の日本侵略者の代表で嘘をつく偽善者」と述べている。辛島の殺害と罪について、清原万里⁽²⁷⁾は、「強者への変身願望が、彼女Vとの関係に絡まって、私Vを辛島殺害へと押しやったと見ることができよう」、松本陽子は「辛島殺害の実行は、言うならば自身の主体性と存在性を取り戻そうとする試みであった」、竹内卓郎⁽²⁸⁾は「辛島の投げかけた罪の問題は『蝮のすえ』では解決されることはなかった」と捉えている。

辛島に関して、先行研究では、辛島の強者の人物像、及び小説中での日本軍国主義の象徴性が指摘されてきた。即ち、伊豆利彦⁽³⁰⁾が「戦中、軍の宣伝部で権力をふるい、今は戦犯として追及されている」とまとめたように、敗戦によって、人生が頂点から地獄に落ちた宿命の持ち主である。強者であった辛島は、敗戦後、旧正月の五日目、上海で刺客によって不審死を遂げた。辛島の死は、松本陽子は杉が「自身の主体性と存在性」を取り戻そうとする試みだと論じている。伊豆利彦は日本軍国主義を代表した辛島の死について、「日本の軍部を打倒したのは日本人自身

ではなかった」と指摘した。

だが、この辛島に関する殺人事件には、まだ幾多の疑問点が残っている。本節は、辛島と辛島の死、即ち死因、時間、場所、犯人を考察したい。

(一) 辛島の人物像

辛島の人物像については、先行研究で「豪傑」のような強者だと論じられているが、この辛島の人物像についての詳しい分析が足りない。まず、小説の描写を引用しながら辛島の人物像を明確にすることを試みる。

「けものみたいな男ですわ」彼女はきつい眼つきをした。(五九頁上段 三)

私は軍の宣伝部で有名な、その辛島なる男を、むろん知っていた。(五八頁下段 一)

私は強力者としての辛島の印象しかなかった。厄介な動物と思い、自分と同じ感情を持つ人間として考えたことはなかった。(六六頁上段 一三―一四)

大きな背中をこちらへ向けたジャンパーの男は明らかに辛島であった。(七八頁下段 五―六)

辛島の艶のよい大きな白い横顔には、傲慢な筋肉が、いかにもたくましく見えた。私は今更のように皮ジャンパーにつつまれた部厚い彼の肩や腰を眺めた。(七八頁下段 一五―一八)

辛島は紅潮した顔でAの両肩をわしづかみにし、輕輕と持ち上げた。(七九頁上段 七―八)

戦時中の辛島のことを杉はまるで厄介な「動物」のような存在であると思っているが、「現代『豪傑』のタイプ³¹」というように考える論者もいる。泰淳は「司馬遷」の中で次のように豪傑を論じた。

英雄豪傑の一番わかりやすい形は武人である。殺人者である。(九九

頁上段 九)

英雄豪傑の飽くなき破壊性は、人間の元気の良さであり、人間の力の大きさを示すものではあるが、そのあらわれ方によっては、凄惨な、陰気な場面をつくることもある。(一〇〇頁下段 一九～二二) 英雄豪傑の数多く、どこにでも生きていることを主張する。(一〇二頁上段 一七～一八)

このような描写を読み、泰淳の描いた辛島は確かに豪傑のような人物像が浮き彫りになっていることがわかる。辛島は、宣伝部に勤めたため、武人ではなくても、文人のAの体を軽々しく投げ出した場面から、武人に負けぬほど勇ましさを持っている。

しかし、金城菜館³²において、辛島は杉との会話の中で、「俺は日本精神の演説をした。君が言うとおり、聞き飽きるほどした。人々はそれを信じて死んだ。俺の若い兄弟も死んだ。奴等は今二度も生き返らん。都々^{トシトシ}的^テ生き返らん……」(八三頁上段 四～七)というように戦中、彼自身のやったことを告白しており、日本国民が「日本精神」の演説を信じ込んで戦場へ赴いて戦死を遂げたことを言い出した。戦争中、「日本精神なき者は売国奴だと演説した」(八三頁上段 一四)にも関わらず、敗戦後、辛島は「俺は日本精神なんかなくても生きていられる」と考えが変わっており、彼の演説および彼のことをまぬけに信じ込んだ日本国民

民、及び日本は「これは一体何なのだ」(八三頁上段 一七)と杉に問いかけた。

金城菜館で、辛島は「日本精神」という言葉を何回も言った。辛島のことを分かるために、「日本精神」は重要な手がかりだと考えられる。

辛島は、戦時中、出版の責任者らの会で演説したことがある。その場で、責任者ではなく、代理であった十七、十八ぐらいの少年を叱責した後、「『日本精神の』と、彼は威嚇するような弁舌を始めた」(七九頁下段 一二、一三)。さて、辛島の唱えていた「日本精神」は、どのようなものだろう。

板垣直子³³は「日本精神」に関しては、次のように論じている。

満州事変の前あたりから国体明徴化の運動がたかきまり、皇道精神の発揚が叫ばれた。かくて日本精神の提唱、日本的なもの、重となり、文学に於いても日本の古典を回顧する傾向がはじまった。(二八九頁)

即ち、「日本精神」は八紘一字を完成するために尽忠報国と日本の古典を回顧するという二つの理解が考えられるだろう。

巖谷大四³⁴は、戦時中、文学界の反応を以下のように述べている。

第一次学徒出陣が行われるころから、物資不足にくわえて、人的にも心細くなって来た。政府はただ、「日本精神昂揚。米英撃滅」の一点張り、大風呂敷のスローガンで、劣勢をひたかくしにするありさまだった。(四二頁)

これは前年（一九四二年）筆者注の「日本文学報国会発表式」に毛のはえた、いわば、「日本文学報国会総会」のようなもので、「大東亜精神の樹立」が「日本精神の昂揚」に縮小（？）され、「大東亜戦争の完遂」が「米英撃滅」と激化した（略）（四七頁）

「日本精神」を提唱されていた時は、すでに、日本軍が劣勢に追い込まれていた時だが、辛島は、国の政策に合わせて活動を行っていたにも関わらず、戦後、日本精神という信念を切り捨てて生きようとした。戦時中、権力を持ち、人妻を奪い、華々しい過去を持ち、戦後、暗殺された「軍の宣伝部」の辛島は、徴用されていた文人を象徴しているのではないだろうか。

（二）辛島の死―死因、時間、場所、犯人、死体の引き取り

以上辛島は戦時中に徴用された文学者だと考察した。

次に、辛島の死に関する情報を纏めてみると、以下通りである。時間は、旧正月五日である。関連人物は、表にいる四人の日本人と、裏にいる一人の刺客である。場所は、上海の楊樹浦行きの電車道路の近くである。凶器は、肉料理に使う細長い鋭利な刃物である。死因は、日本人以外の国籍不明の刺客に致命傷を与えられたことである。

彼の死について、杉の「強者への変身願望」、「自身の主体性と存在性を取り戻そうとする試み」であるというような論点がある。しかし、杉は、実は辛島を殺していない。

突然私は、なかりはなれた場所で、砂利をふみにじる靴音をきいた。

それと同時に非常に速さで走る別の軽い足音をきいた。それから誰かがドスンと地面へ倒れる音をきいた。（九二頁下段 一九～二二）
私は彼の背に刃物が一本突き刺さっているのを見た。肉料理に使う細長い鋭利な刃物であった。それは外套の上から、彼の心臓か肺臓を貫いているのであった。（九三頁上段 二〇～二二）

杉は斧を持ち、辛島を殺そうと決心してやってきたが、月光にはつきり照らされていない夜中、明らかに別人の二人の足音が聞こえてきた。一人は、辛島だとすると、もう一人は、恐らく、刃物を使って辛島に致命傷を与えた刺客である。ここで「きいた」が三つ連続で使われている。一人がやってきた時の勇ましき、もう一人の動きの素早さ、その中の一人が砂利にぶつかった時の重さがこの三つの「音をきいた」描写からリアルに感じられる。

杉は三回目（一回目は空振り）に斧を振って辛島の首筋を切った時、ようやく刺客の存在を気づいた。先行研究では、「杉」は真犯人ではないことを清原万里と小田切秀雄だけが指摘した。小田切秀雄は「彼女は、実際に刺客を頼んで夜の路上で辛島の心臓を刺させる」、清原万里は「（私）は辛島を殺してはいない。（略）（私）は、まもなく死ぬ無抵抗な人間に斧で切りつけることになったのである」と指摘した。しかし、疑問点がまだいくつか残っている。本節では、戦犯と追及される辛島の死について、死因、時間、場所、真犯人、死体の引き取りから順次考察したい。

まず、辛島の死因に着手する。小説に登場した四人の主人公は、それぞれ辛島の死と絡まっている。杉が辛島を殺そうとする理由については多くの先行論で既に触れられているので、ここでは、彼女と病人の夫の

理由を探つてみたい。

辛島を殺したいと最初に言い出したのは、病人の夫である。「辛島のような男を、滅亡させるような、ことをやります」(六二頁上段 一一)と病人の夫が杉に告白したのである。辛島を殺す理由として、病人の夫は、誰でも軽蔑され、妻までも寝取られ、妻のもらった金で生き延びていることを、「僕は、屈辱のまま、何一つそれをかき消さずに、土の下に入るの、イヤです」(六二頁上段 一三―一四)と思つていたのである。

病人の夫は、「屈辱」を晴らすために、辛島を殺したがっているのに対して、彼女は何故辛島を殺したいと思つているのだろう。

わたし、よく辛島の夢見るわ。辛島を殺す夢見るわ。(六二頁下段

一一)

辛島なんか殺されりゃいいのよ。今すぐ誰かに殺されてくれりゃの
に(六七頁上段 一五―一六)

あなた辛島が殺せる？(六七頁下段 一八)

あれも取消すわ。殺そうなんて考えないで。(八七頁下段 二二)

彼女は昔から辛島を殺そうとしていたようであるが、「この女は本当に辛島を憎んでるだろうか」(五九頁下段 一八―一九)と杉は彼女の辛島に対する感情を疑っている。それにしても、何故杉に殺人を願つたのだろうか。「辛島はわたしがあなたを頼りにしていること感づいたのよ」(六七頁下段 一〇)と彼女が気づいた時に、これは「死ぬか生きるか」(六七頁下段 一〇)と不安に思い始めた。辛島は自分のことを殺すことができないと彼女は知っているはずである。すると、ここでは、

生と死の境目に追い込まれた人は、杉になってしまふのではないだろうか。

もう辛島のこと関係しないで。わたし心配なのよ。(略) あなたが

殺されでもしたら(八七頁下段 二二―八八頁上段 四)

辛島が死んだんなら、何もあわてて日本へ帰らなくてもよかつたの

ね(九七頁上段 一四)

もちろん、日本の人じゃないけど。殺したりすること商売のように

ひきうける人。私の知ってる人でね。(二〇一頁上段 一一―一二)

彼女は本気で辛島を殺したがっていると考えられる。その理由は、杉のような新しい頼りができたからではなからうか。「あの女は、俺には精神的なものがないが、杉にはある」(八二頁上段 一五―一六)と辛島が言った。彼女は、急いで上海を脱出したのだが、辛島の死を知った後、「彼女は帰国の荷物に縫いつける目印の布をこしらえながら、のんきそうに言った」(九七頁上段 一五―一六)という態度を、杉は「不快」と思っていた。辛島は彼女にとってトカゲのしっぽのような存在である。生きるために、自分のことを守るために、邪魔になるものを切り捨ている。彼女のこの動物のようなエネルギーシユな生命力こそ、辛島と杉は惹かれていた。

辛島は一人で密かにフランス租界に隠れていく場合、戦犯の追及を逃れた可能性もあるが、彼女に計画を告げ、結局彼女に排除されてしまった。

次に、辛島の殺害時間を分析したい。小説の時間順に従い、旧正月の

五日目だと推測できる。旧正月に関する描写は、杉と辛島との面会、及び辛島の殺害に入ってから描かれていなかった。小説で、旧正月に関する記述は、以下通りである。

鉄門を出ると方々で爆竹の音がした。耳もとても鳴った。明日は旧正月の元旦だった。家々の柱や扉には、赤い紙が貼ってあった。もうちぎれ、街角の埃に舞っているのもあった。それは枯葉や紙屑の中に、異様にあざやかに見えた。赤い布でくるんだ赤坊を人力車で運ぶ主婦もいた。それらの赤色は、何か暖かく、又神秘的に見えた。帰る路すがらその祝祭の赤色ばかりが目に入った。(六四頁上段下段)

虹口市場は休んでいた。その二階建てのひどく大きなコンクリートの灰色の体がいつもは、商人や買い出しの人人に賑やかに埋められているのに、今日はむき出しであった。そのほかの中国人の商店も戸を閉じていた。朝もやがはれたばかりの街全体が死んだようになっていた。(七〇頁下段 一二一―一二七)

爆竹の音がひとしきりした。高く、強く、乾燥した空気を張り裂くようであった。(七四頁下段 一九―二〇)
外は正月であった。河船の上で、赤や緑のあくどい衣をつけた男が二人おどっていた。日本の万才に似たものらしかった。踊る男も見物する子供たちも楽しそうであった。(七六頁上段 一八―二〇)

旧正月と小説の關係に関しては、小田切秀雄は「帰るのを送って階下に降りてきた彼女(中略)にたいする杉の心の反応を作者はすぐに描く代わりに、門を出てから見た旧正月前日の上海庶民風俗の景に移る」

奥泉光⁽³⁸⁾は「旧正月の前日―出来事が起こっているのが正月前後だということも、結構大きなポイントなのかもしれませんが―女の頼みで、杉は女の家に行き、病気の夫と会う。二人は杉を頼みにしているなど」と論じている。

この小説の出来事が、中国の旧正月に起きたことについては、小田切秀雄と奥泉光が少し触れているが、二人は、旧正月と辛島の殺害との關係に言及していない。

羽根田市治⁽³⁹⁾の上海県史に関する考察によると、上海では旧正月に関して次のような慣習がある。

元旦、中国全国同様、鶏鳴に起き爆竹を鳴らし鉦鼓を撃ち、家廟に参拝し、燭香、供物を飾り、赤色の名刺を配り「鴻喜、鴻喜」と慶賀を交し、三日まで門戸を閉じ酒宴打牌に興ずる。

四日、発財の神の降来を迎える日、元宝魚を赤繩で結び発財の神に供える。

五日、朝から財神酒で祝う。四日に供えた元宝魚を招いた親類、縁者、友人たちと食す。

十三日、家人は玉蜀黍を炒り一年の吉凶を占う。ト流花と言う。
一五日、元宵節、正灯日。(八八頁―八九頁)

旧正月の五日目から、中国人にとっては、旧正月はまだ終わっていないが、大体の店が営業を開始する。殺人を商売とする者もこの日をもって営業し始めるだろう。旧正月は、中国人にとって、新年の始まりである。この大切な日に、戦犯の辛島は中国で若しくは中国人の暗殺者によって殺され、その他の中国に關係を持つ三人、杉、彼女、病人の夫も中国

を去ってゆく」と暗示しているのではないだろうか。

そして、殺害現場は、敗戦後、上海の楊樹浦行きの電車道路の近くの空地である。

楊樹浦について、吉行エイスケは、「上海の最大な危険区域であり」と述べている。この時期の楊樹浦は「アンダーグラウンド」「犯罪の多発する」というようなイメージがある。辛島は、何故、楊樹浦の辺りで殺されたのだろうか。また、辛島は戦犯であるため中国に裁かれる可能性が高い。「彼女」、「病人の夫」、「杉」と一緒には引揚船に乗れないのである。

陳祖恩⁽⁴⁾の考察によると、呉淞は日本軍収容地区、浦東は日本海軍陸戦隊、日本人居留民は虹口に集中させるということである。

範囲は上海神社東側の土囊を南端とし、北四川路橋を東南端とし、その東側に位置する虹口地区のおよび楊樹浦地区を居住地域範囲とした。また日本人捕虜は大場鎮、江湾、虹橋地区を指定しているが、市内の特に南市として閩北方面の部隊はそこに集中させ、郊外の日本人部隊は多くを現状維持とした。(三三頁)

辛島は軍人として、彼女、夫、杉とは異なる地域に集中されるはずである。小説に、杉、彼女と夫の住む場所は明白に書かれている一方、辛島だけが住んでいる場所が明確に書かれていない。死ぬ場所さえ楊樹浦行きの電車道路に近い場所としか分からない。

最後は、真犯人を探ってみる。辛島を殺害した真犯人は刺客のような

暗殺者である。辛島が「豪傑」であるならば、辛島を殺した暗殺者も異色の豪傑と言えるだろう。刺客に関しては泰淳が「司馬遷」の中で次のように書いた。

「刺客」とは何か？突如として現れ、忽焉^{こつえん}として没するものである。彼らが歴史に接するのは、武器を手にして権力者に近づく、その一瞬時である。曹沫^{そうぼつ}が匕首^{あいくち}を執^とって齊の桓公^{おひこ}を劫した時、専諸^{せんしよ}が魚腹中より匕首をとり出して王僚を刺した時、その時だけが歴史的瞬间である。彼らはその瞬間のため英雄豪傑となり得た。その瞬間によって歴史に参加した。(一〇三頁下段 六〜一二)

暗殺は常に、劇的なもの、悲壮なもの、歴史的なものとなるのである。(二〇四頁上段 三〜四)

刺客の暗殺行為は、いつも成功するわけではなく、成功することとはとも少ない。しかし、失敗していても、「精神的の美しさ」(一〇四頁上段 一)を後世の人々に語られた。「蝦のすえ」に登場したこの刺客に触れた情報が極めて少ない。

わたしにはね、他にも知ってる男の人がいるのよ。朝鮮の人も中国の人もね。頼めば何とかしてくれる人たちの。(八九頁上段 一六〜一七)

もちろん、日本の人じゃないけど。殺したりすること商売のようにひきうける人。私の知ってる人でね。(一〇一頁上段 一一〜一二)

刺客は、「日本の人」ではない人である。ここでは、「日本人」ではな

くて、「日本の人」が使われている。「日本人」は、日本国籍を持つ人で、「日本の人」は、日本に関係のある人と言えるだろう。日本人の親を持つ混血児、または、日本の協力者（漢奸）である暗殺者は、この二種類の人ではない。だとすると、純血の中国人、或いは朝鮮人、さらに第二次世界大戦中、上海に亡命に来たユダヤ人、ロシア人の可能性もある。枢軸国陣営に属する日本を憎んだ人ならば、誰でも辛島のような戦争協力者を殺したかっただろう。

殺人凶器となった「肉料理に使う細長い鋭利な刃物」についても考えておきたい。殺人を商売とする人ならば、ピストルを持っているはずなのに、夜中に、刺客はわざと近距離でないと殺傷力のない刃物を使っていた。まるで豚を解体するかのよう感じられる。古風の暗殺者である。確かに、この刺客は彼女の指図を受け、暗殺行為をした。そして、刺客の手で確実に戦犯である辛島の命を終わらせ、死体は、誰に引き取られるのかについても分からない。

五、一九四七年前後武田泰淳の中国観

泰淳の中国観を考察する場合に、三つの時代に分けられると考えられる。第一時代は、中国文学研究会の成立から中国で敗戦体験までの時代、すなわち一九三四年から一九四五年前後の時代である。この時期において発表した「廬州風景」（一九三九年）、「E女士の柳」（一九四一年）などの作品がある。第二時代は、日本に帰還後から中国文化大革命までの時代である。この時期においては、「風媒花」（一九五二年）などの作品がある。第三時代は、文化大革命の一〇年である。この時期に発表した小説は、『富士』（一九七一年）などがある。

白井吉見⁽¹²⁾は戦中戦後泰淳の変化を以下のように述べている。

『才子佳人』の作者が、『秘密』や『蝮のすえ』や『黒旗』の作者に転身したのは、おそらく戦後の文学的風潮が強く作用したにちがいない。この作家の周囲にあった同時代の新作家たちの影響をおそらく見のがすわけにはゆくまい。椎名麟三の実存的な模索、野間宏、梅崎春生らのエゴイズム追及など、一般に戦後文学の根幹となったエゴイズムとニヒリズムに対する格闘、そういう新しい戦後の文学的風土こそ、『才子佳人』の作者を急速に『秘密』や『審判』の作者たらしめたのではないかと思う。（一一六頁）

一九四五年、上海で敗戦を迎えた体験は、泰淳の文学に大きな影響を与えたとよく言われる。白井は、戦中、戦後泰淳の文学に大きな変化が起きたを述べた一方、戦後、同時代の文学環境も泰淳に強く作用していると指摘した。本稿は、第二時代に当たる泰淳の敗戦直後の混沌時期における中国観を考察したい。

辛島は、刺客に殺された。まさに伊豆利彦の「日本の軍部を打倒したのは日本人自身ではなかった」という指摘通りに、日本の対外的な国家行動とその指導者に関する戦争犯罪の有無に関する裁判も、アメリカが主導して行っていた。

吉田裕⁽¹³⁾は、杉の暗殺失敗について、次のように指摘した。

主人公は選択した決意したところ自己の運命を全うしえず、辛島に、そして彼象徴する歴史そのものに本当の意味では触れえなかったのではないか。歴史の回路は完成にまさしくあと一步のところまで、

それをつなごうとする人間の努力をはぐらかしたのである。武田がこの回路の全体的な姿を見ることにもっとも接近しえたのは「蝮のすえ」であることは疑いをいれないが、その時すでに失敗が彼を襲ったのである。(略) 辛島を歴史として受けとめたのは正しかったが、再び歴史に向かおうとする時歴史はすでに辛島ではありえず、辛島だと考えることは決定的に誤りだ、というふうには。(一一六頁)

戦中の日本軍が中国大陸や東南アジアで犯した暴行行為には目に余るものがあっただろう。日本の侵略戦争が始まった後、中国文学者でありながらも戦争に反対していなかったばかりか、兵士、侵略者として、殺戮に加わった。一九四四年、徴用のがれの意味もあって上海に渡り、中日文化協会に就職した。一九四七年、泰淳が日本に戻ってから二年目であり、東京裁判が始まってから二年目でもある。

松原新一・磯田光一・秋山駿⁽⁴⁵⁾の考察に拠ると、「戦後の文学の場で追及された主要な問題の一つとして、文学者の戦争責任の問題がある」と述べている。

中野重治⁽⁴⁶⁾も「日本の人民がその封建的・半奴隸的状态から肉体的にも精神的にも脱け出すこと、それを自己の手ですること、民族の何十万という美しい青年が、何のために死かということ、日本人を人間にすること、日本人が人間となること、これが日本人の当面の問題であり、日本文学の当面の問題の基盤である。」と論じていた。

千田九一⁽⁴⁶⁾は『中国文学別巻』の「復刊の詞」に、戦中戦後、文学者の心境変化を以下のように述べている。

終戦の前夜まで、正直に言って、われらは「聖戦」にひきずられて

ゐた。(略)

昭和十八年三月、中国文学研究会は竟に解散し、雑誌「中国文学」は休刊の已むなきに至った。われらは淋しかった。われらも、犠牲になった。文化のぎりぎりの姿に身を委ねたのである。(略)

遂に戦争は豫期しない形で生き熄んだ。(略) 敗戦のもたらした唯一の恩恵―真実と自由の基盤に立って、われらは更めて隣邦支那を敬愛し、ひたすらに支那の文學に親しむ道から日本文化の復興を念じ、ひろく世界文化への貢献を熟願するものである。(四頁―五頁)

辛島に対して、杉は、戦中「その自信力を私は憎み、その弁舌のさわやかさを憎み、そして彼によって代表される権力を憎んだ」(七九頁下段 一七―一八)と言って、戦後、「もし今彼を憎むなら、彼の個性を憎むのであって、背後の権力を憎むのではなかった」というように考えが変わっていた。泰淳は、杉の口を借りて戦時中の文学者に対する認識を述べていたのではないだろうか。

国家政策に従い、権力に屈服するか、或いは反抗して信念を貫くか、これは、個人の個性に関係する。戦中、辛島のような文人は国家権力に便乗、迎合したが、結局、戦争の犠牲になった。辛島を処罰するのは、日本ではなくて、暗殺者であった。日本人は、「日本精神」の誤りを治すことができなくて、他国の手を借りてやっているということだろう。

泰淳は辛島の死を通して、戦争協力者だった文学者らに処罰を受け止めようと発信しているのではないだろうか。同時に、戦争の協力者であった自身はどのように「歴史」を反省すべきかを模索していると言えるだろう。

注

- (1) 川西政明『武田泰淳伝』（東京講談社、二〇〇五年）
 (2) 堀田善衛著紅野謙介編『堀田善衛上海日記滬上天下一九四五』（集英社、二〇〇八年）一三三頁、二四四頁
 (3) 《中国境内日本侨民集中管理辦法》（《中国战区日本投降文献汇编第二册》中華民族陸軍總司令部、一九四五年、全国图书馆文献缩微复制中心、二〇一〇年）
 本資料は中国語である。

第一条 中国国内（東北三省を除く）各地に散在する日本僑民は、当該地区の中国陸軍の受降を担当する指揮官が指定した区域に集中させ、省政府または市政府にその管理を移管する。

第二条 日本僑民の集中について、各地区の中国陸軍の受降を担当する指揮官は、該当地区の日本官兵善後連絡部長に命じて收容者の名簿を作成させ、かつそれに従って集中させる。

第三条 命令に従って集中する日本僑民は、衣服、寝具、炊事道具、洗面道具、及ぶ既に手持ちの食料など日常生活に必要な品物を携行することが許される。時計、万年筆、図書（軍事と関連のないもの）のような私有物品を持ち込むことが許される。私用貨幣は中国法幣五千元（偽幣の場合、中国政府が決めた為替率で変換できる）まで持ち込むことができる。携帯が許されないもの、あるいは携帯できない物品は、当地の省政府、市政府に預けることとする。携帯が許されないもの（中国日本その他の国の貨幣、金品、宝石など）価値のあるものは全て自分で中国政府銀行に預托し、将来の賠償金の一部にあてることとする。ただし、記念品を除く。

第四条 日本僑民の集中期間は、各地区の受降を担当する指揮官が各地事情によって決める。

第五条 期限内に命令に従って集中しない日本僑民は、各地区の受降を担当する指揮官は、当地の地方政府と、詳しく調査し強制的に集中させ、命の安全を保障しない。

第六条 各受降地区は、原則的に一か所に集中させる。集中用部屋が足り

ない場合、複数の居住地に集中させる。

第七条 日本僑民集中居住区は、指定された集中用部屋に泊まり、各当地区の中国陸軍の受降を担当する指揮官は、同省政府、市政府と担当者を選遣し管理する。

第八条 各地区の日本僑民集中居住区ごとに日本僑民集中管理所を設置する。一か所に複数の集中居住区が設置される場合は、数字をつけてこれを区別する。

第九条 日本僑民集中管理所に一人所長を設置する。下に、事務内容の複雑さにより事務員を数人配置し、原則に省政府、市政府が派遣する。

第十条 日本僑民集中管理所の雑務は管理所長により、日本僑民に配り、指揮する。

第十一条 日本僑民集中居住区の警備は、各当地区の中国陸軍の受降を担当する指揮官は憲警或いは部隊を派遣し担当する。各地区の管理所所長の命令を受ける。

第十二条 日本僑民集中管理規則は、当地の状況により決める。日本僑民の外部との通信は検閲され行動も監視される。ただし家族が一緒に住むこと、および日本僑民自らが一種の自治組織を作ることには許可し、管理の利便性を図る。

第十三条 第三条の規定を守らない日本僑民に対して、私蔵の財産及び物品を没収する。賠償ができない。管理規則を守らない日本僑民は、管理所が中国法律に従い受理し、状況が深刻である日本僑民は法辦に渡す。

第十四条 日本僑民集中後、主副食事の提供は日本俘虜の待遇と一致する。原則に各地区の省政府、市政府が担当する。ただし、初期各当地区の中国陸軍の受降を担当する指揮官が代理する。と同時に、主副食事の提供は、代金券の発行が出来る。ただし、実物と代金は、必ず人数分で計算し、尚管理所所長が受け取り、日本僑民自治組織の代表者に受領証をもらう。これは、将来中国政府は日本政府に弁償をもらう証拠とする。

第十五条 日本僑民管理所には日本僑民に民主政治をもつて、軍閥主義を消しざる教育を行う。

第十六条 日本僑民を返還する方法は他の規定による。
第十七条 本方法は一〇月一日から実施する。

陳祖恩の〈上海日本人居留民战后遣送政策的実相〉(『社会科学』二〇〇四年第二期)によると、上海日本僑民集中营には保甲制度を使う。戸を単位に、戸長を設置し、十戸を甲になり、甲長を設置する。日本僑民管理所は、甲長会議を開き、日本僑民の日常管理と思想教育を強化するという。

呉慶生の〈战后日本军队及侨民的收容、管理和遣送〉(『绍兴文理学院学报』第二〇〇卷第三期二〇〇〇年九月)によると、毎日午前六時以前、及び午後八時以降は、留営時間であるため、外出禁止という。

(4) 『武田泰淳全集』第十六卷(筑摩書房、一九七二年)四六二頁

(5) 泰淳の引き揚げの時間は、今まで三説がある。川西政明は、一九四六年二月三日に上海を出港、病人の大家の野々口と一緒に、病人を運ぶ引き上げ船「高砂丸」号に乗り、日本に戻った後に、五日に鹿児島に着いた。あるいは二月一日、上海を出港し、二日に鹿児島に着いた。このうちのどちらかの船に泰淳は乗っていたと川西が言っている。一方、古林尚の「武田泰淳年譜」(一九八〇年)によると、「四月、引揚げ船で帰国」と書いている。しかし、『堀田善衛上海日記滬上天下一九四五』には、「Tは三月十七日に、Iは三月三十一日に、Aは四月八日に、Nは四月十六日に、夫々皆かえつてしまつた」と書いている。Tは泰淳のことを指している。日記によると、泰淳は一九四五年三月一日、上海を離れたらしい。即ち、泰淳の引揚げ時間は、二月、三月、四月と異なる論述がある。

(6) 黄翠娥「終戦前後の上海について―武田泰淳の「上海もの」を中心に」(『台大日本語研究』二二二号、二〇一一年一月)七三頁、七三頁に参照。

「上海化」一九四四年八月十日 『大陸新報』『武田泰淳全集』第十八卷

「秋の銅像」一九四六年九月 『文化人の科学』『武田泰淳全集』第一卷

「異国放浪」一九四六年一〇月 『中国文学』『武田泰淳全集』第十二卷

「審判」一九四七年四月 『批判』『武田泰淳全集』第二卷

「嫂のすえ」一九四七年八月から一〇月に『進路』『武田泰淳全集』第二卷
「才女」『隨筆中国』第二号(発行年月未詳)に載せ、後、一九四七年一月に「才人佳人」に収録。『武田泰淳全集』第一卷

「滅亡について」一九四八年四月 『花』『武田泰淳全集』第十二卷

「非革命者」一九四八年五月 『文芸』一九四八年一月から二月 『小説界』『武田泰淳全集』第二卷

「苦笑の前後」一九四八年一月から二月 『小説界』。『武田泰淳全集』第二卷

「月光都市」一九四八年二月 『人間美学』一九四八年一月から二月 『小説界』。『武田泰淳全集』第一卷

「F花園十九号」一九五〇年九月 『文学界』一九四八年一月から二月 『小説界』。『武田泰淳全集』第三卷

「上海の螢」一九七六年二月から九月までに『海』 武田泰淳全集』第十八卷

(7) 立石伯「武田泰淳論」(講談社、一九七七年)八三頁

(8) 清原万里「嫂のすえ」論―「罪」の問題をめぐって―(『近代文学試論』第二五号、一九八七年)二九頁

(9) (7)に同じ、八八頁

(10) 渡部範子「武田泰淳論―『司馬遷』から『嫂のすえ』まで―」(『日本文学論叢』第一〇巻、一九八一年三月)六六頁

(11) 服部一希「嫂のすえ」論(『日本文学誌要』第四〇号、一九八九年)七三頁

(12) 道園達也「武田泰淳『嫂のすえ』論」(『国語国文学研究』第三四号、一九九九年三月)

(13) 李慶保『武田泰淳(嫂蛇的后裔)人物分析』(『安徽文学』(下半月)、二〇〇九年五月)二〇九頁

(14) 陳文「武田泰淳『嫂のすえ』―知識人としての精神的主体性の再構築―」(修士論文、二〇一〇年一月)

(15) 同(6)、八八頁

(16) 小田切秀雄「嫂のすえ」(『武田泰淳研究』、一九七三年)三二八頁

(17) 陳祖恩「上海に生きた日本人―幕末から敗戦まで―」(大修館書房、二〇一〇年)

- (18) 榎本泰子『上海 多国籍都市の百年』(中公新書、二〇〇九年)
 (19) 熊文莉「無国籍者との出会い―武田泰淳の上海体験―」(『日语教育与日本学研 究论丛』第三号、二〇〇六年二月) 一〇七頁
 (20) 羽根田市治『夜話 上海戦記』(論創社、一九八四年) 二五四頁、二五五頁
 (21) 歴史学研究会編『戦後日本史1』(青木書店、一九六一年) 三九頁
 (22) 児島襄『東京裁判 上』(中央公論社、一九七一年) 七頁
 (23) (16) に同じ、三三二頁
 (24) 吉田裕「歴史はいかに現れるか―武田泰淳の『司馬遷』と『蝮のすえ』につ いて」(『早稲田文学』第八次)(八四)、一九八三年五月) 一一〇頁
 (25) 岸本隆生『武田泰淳論』(桜楓社、一九八六年) 五二頁
 (26) (13) に同じ、二一〇頁
 (27) (8) に同じ、三三三頁
 (28) 松本陽子「武田泰淳『蝮のすえ』論―殺害決行に至る道程―」(『論潮』第一巻、 二〇〇八年六月) 一四頁
 (29) 竹内卓郎「武田泰淳『蝮のすえ』における「私」の辛島殺害に至るきっかけに ついて」(『明治学院大学院国際学研究紀要』第二二号、二〇一三年三月) 五頁
 (30) 伊豆利彦「日本の近代とアジア：『大東亜戦肯定論』と夏目漱石・武田泰淳」(『日 本文学』第四二巻一号、一九九三年一月) 五六頁
 (31) (16) に同じ、三三二頁
 (32) 菜館と酒楼は区別がたいが、菜館は昼は茶を呑みながら、世間話、商談など の情報所になっているが、夜は一転して売春婦などの稼ぎ場で婦人や子供など は同伴できる場所ではないものが多かった。羽根田市治『夜話 上海戦記』(論 創社、一九八四年) 一五九頁に参照。
 (33) 板垣直子『現代日本の戦争文学』(六興商会出版部、一九四三年) 一八九頁
 (34) 巖谷大四『非常時日本文壇史』(中央公論社、一九五八年) 四二頁、四七頁
 (35) (16) に同じ、二八六頁
 (36) (8) に同じ、三四頁
 (37) (16) に同じ、二八二頁

- (38) 奥泉光 松永美穂 鹿島田真希「合評『蝮のすえ』『わが子キリスト』」(『群像』 第六五号、二〇一〇年一月) 一四一頁
 (39) 羽根田市治『上海の縣城志』(竜溪書舎、一九七八年) 八八頁、八九頁
 (40) 吉行エイスケ「新しき上海のプライヴェート」(先進社、一九三三年) 四六頁
 (41) 陳祖恩「上海日本人居留民戦後送還政策の実情」(『北東アジア研究』第一〇号、 二〇〇六年) 三三頁
 (42) 白井吉見「人生非情の傍観者―武田泰淳論」(『文学界』第六巻三号、一九五二 年三月) 一一六頁
 (43) (24) に同じ、一一二頁
 (44) 松原新一・磯田光一・秋山駿著『現代の文学別巻 戦後日本文学史・年表』(講 談社、一九七八年) 四四頁
 (45) 中野重治「文学者の国民としての立場」(『中野重治全集 第十二巻』筑摩書房、 一九七九年) 二八頁
 (46) 千田九一「復刊の詞」(『中国文学別巻』第九号、生活社、一九四六年三月) 四 頁、五頁

「付記」『蝮のすえ』の文章の引用は『武田泰淳全集 第二巻』(筑摩書房、一九七一年) 「司馬遷」の文章の引用は『武田泰淳全集 第一巻』(筑摩書房、一九七一年) に依った。

*引用文の漢字は、現行の字体に統一し、仮名遣いはそのままとした。
 (文学研究科日本文学専攻博士課程後期三年次)

Taijun Takeda's views on China around 1947 - centering on the death of Karashima in the novel *Mamushi no sue*

LI Nana

[Abstract] *Mamushi no sue* ("The Viper's Descendants") is set in Shanghai immediately following the end of World War II in 1945, and is a tale portraying the lives of the Japanese residents in the city after Japan's defeat in the war.

In this paper I focus on the persona of Karashima, the male protagonist, and his death. During World War II, Karashima, who represents Japan's power propagates "the Japanese spirit," but after the war spends a more favored life than the average Japanese citizen despite the knowledge that he will be sentenced to death if caught by the Chinese authorities. Having stolen the wife of one of his subordinates, he takes her with him to the French quarter where they attempt to hide.

On the night of the fifth day of the old New Year in post war Shanghai, the character Sugi attempts to follow her request of murdering Karashima. However, a Chinese or Korean assassin that she has arranged has already killed Karashima with a meat cleaver. If Karashima is not killed, there is a chance that he will kill Sugi. In the end, Sugi suggests that "...perhaps living is not so difficult after all..." But Karashima who represents the power and history of Japanese militarism, is not able to live out his life. Sugi, the woman and her sick

husband are the only characters that manage to return to Japan.

This novel was first published in 1947 against the backdrop of the Tokyo War Crimes Trials. The Trials were conducted under the guidance of the United States, and the guilt of war crimes was judged not by the Japanese themselves but by a foreign power. The author, who witnessed the end of the war in Shanghai as a ruler, suddenly finds himself as one of the ruled. Through the death of Karashima in *Mamushi no sue*, Taijun Takeda was trying to get across the message (that those in the literary community should not hide from the fact that they too were war criminals who assisted in the war, and should therefore accept some form of punishment. Simultaneously, it could perhaps be said that the author is also looking for some way to show his regret about recent 'history' in his capacity as a collaborator.

[Keywords] Taijun Takeda, regret for the war, Shanghai, Karashima, murder